6　文化芸術を活用した地域振興

石井隆一氏（富山県知事）より、南砺市利賀村における演劇による地域おこしの事例の紹介を通じて、文化芸術を活用した地域振興のあり方と課題についての話を伺った。

１．はじめに

○　この３月14日（2015年）には北陸新幹線が開業し、富山県民は新幹線開業まで約半世紀の間待った。現在、開業して３カ月が経ち、乗車人員が開業前の同時期に比べると3.3倍になった。４月、５月で見ると富山県内では、宇奈月温泉の宿泊者が、対前年度比46％増となり、高岡市の国宝瑞龍寺の参拝者は、７割増になった。

○　東京－富山間の所要時間が最短で２時間８分になり、輸送能力についても臨時便も含めれば、従来の北陸本線が満席で約600万席であったのに対し、その３倍強の約1,900万席超になった。

これを一過性にせず、しっかり持続させて、次の発展にどのようにつなげていくかということがある。特に、地方創生を中央政治の重要テーマにしてもらったので、この新幹線開業と地方創生という二つのフォローを風にしながら、しっかり富山県の新しい未来を築きたいと思っている。その際には、芸術文化も大事に生かして進めていこうと思う。

２．文化芸術の振興と魅力的なまちづくり

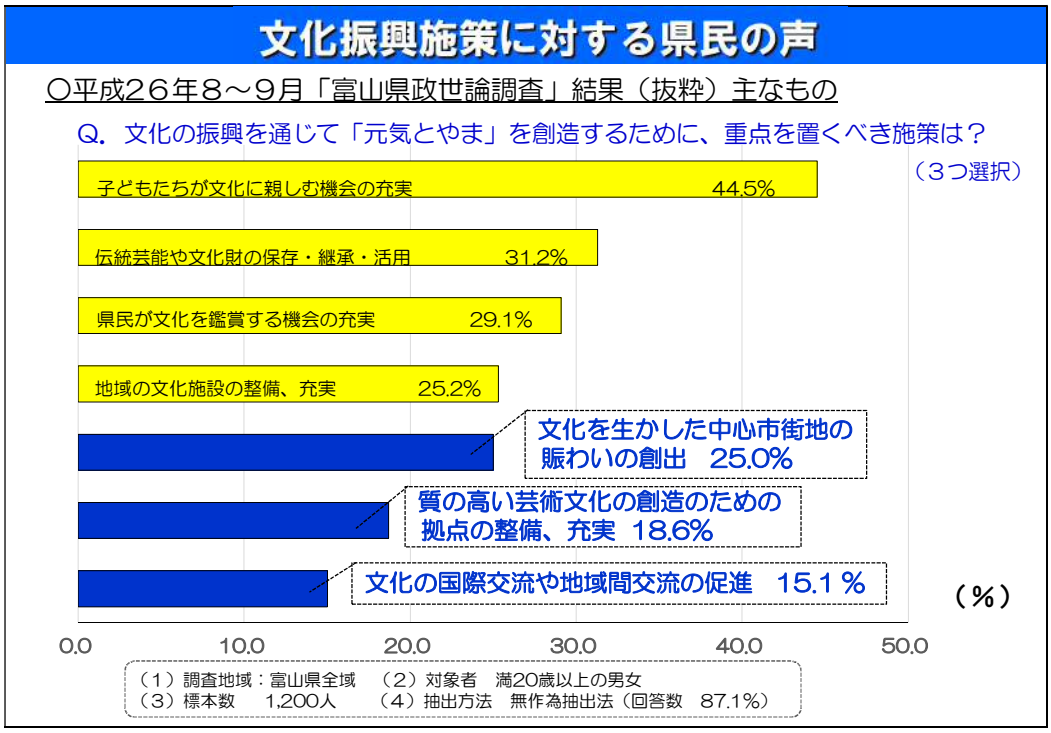
○　富山県民の県民性は、文化芸術の振興に大変熱心である。また、人口108万人の富山県にあって、公立の美術館・博物館は、市町村分も入れて35館あり、人口100万人当たり32.2館で、全国３番目に多い県である。客席300席以上の文化ホールにあっては、31館あり、人口当たりでは全国１位になっている。

○　県民がどの程度芸術文化に親しんでいるかについて、社会生活基本調査で見ると、芸術文化・美術鑑賞４位、邦楽２位、書道３位となっている。また、１世帯当たりの新聞発行部数は1.07部で全国１位になっている。

○　富山県民に対する文化振興に関する意識調査の結果を見ると、「子供たちが文化に親しむ機会の充実」を選択された方が一番多く、44.5％を占めており、次が「伝統芸能や文化財の保存・継承・活用」、「県民が文化を鑑賞する機会の充実」になっている。「地域の文化施設の整備、充実」も25.2％で、比較的に高くなっている。次が

「文化を生かした中心市街地のにぎわいの創出」で25.0%になっている。

○　「質の高い芸術文化の創造のための拠点の整備、充実」で18.6%、「文化の国際交流や地域間交流の促進」が15.1%と続いているが、特に舞台芸術中心の文化振興という意味では、必ずしも県民が挙って、南砺市利賀村での舞台芸術の振興をどんどん進めてほしいという感じはなく、優先順位はさほど高いとも言えない。そこがある意味では悩みである。しかしながら、今のままでは物足りなくて、進めてくれという人もそれなりにいる。比率は少ないものの、熱心な方々が多くいる。



資料１　文化振興施策に対する県民の声（富山県資料）

○　芸術文化の振興というときは、まず、文化活動への幅広い県民の参加を求めていくため、参加機会の提供を行う。公立文化ホールでの共同公演や一流の音楽家をお招きしての小学校での出前コンサート等である。今年はちょうどいろいろな節目の年でもあったので、新幹線開業にあわせて、50周年記念の県民会館をリニューアルオープンする等、いろいろな取組みを行っている。

○　富山県には文学館がなかったので、知事公館を思い切って廃止・改修、一部増築して、「高志の国文学館」を開館した。富山県にゆかりがあり、万葉集の編纂者と言われている大伴家持は、1300年ほど前に誕生し、天平18年、西暦746年から越中の国（富山）の国司として5年間赴任していた。大伴家持が、越中で詠った歌が223首あり、万葉集の中に残っている。そのようなことからも、我々富山県民は大伴家持をすごく大事にしている。

○　また、富山県利賀芸術公園では、幸いに鈴木忠志さんという、舞台芸術の世界では大変有名な方に活躍いただいているので、そこを拠点とした「国際芸術村構想」を進めている。

○　富山県近代美術館は開館して35年ほど経つが、20世紀のピカソ、ポール・デルヴォー、ジャスパー・ジョーンズ等、地方の美術館としては驚くほどの名品が揃っている。やや敷居が高く、県民に親しまれているとは言い難いが、耐震性に問題があったことや老朽化してきたこともあり、移転新築工事を実施している。

○　その他、文化と他の分野の連携を図るため、歴史と文化が薫るまちづくり事業という地域文化資源を活用した様々な市町村や民間の取組みを支援するということにも力を入れている。

３．演劇による村おこしと地方再生～南砺市利賀村～

○　富山県は能登半島と新潟県の間にあり、南砺市はその西の石川県境寄りにある八つの町村が合併した面積が琵琶湖ぐらいの市である。その中にある利賀村は、五箇山地域の中でも最も奥まった、まさに秘境の中の秘境という場所にある。

○　平、上平地区を中心とした合掌造り集落は、岐阜側の白川郷とセットで世界遺産になっている。重要伝統的建造物群保存地区の指定は白川郷も五箇山も受けているが、その上で、五箇山は史跡指定も受けている。それだけ元の姿をしっかり守り、生業も含めた伝統的な生活スタイルが今なお残っている場所である。

○　この南砺市の他の地域には、観光名所として、井波の瑞泉寺などがある。また、城端には、「東京よりここ城端でやりたい。」というアニメの制作会社が来ている。そういった新しい動きも出てきた。

○　富山県利賀芸術公園は、私が知事に就任する前の1994年に、12万4,000平方メートルある広大な土地をすべて県立の公園として指定された。公園までの最寄りの駅としては、富山市のＪＲ越中八尾駅や南砺市の東海北陸自動車道五箇山インター等もあり、いろいろな方面から来ることができるが、それらから車で１時間程度もかかることから、秘境と言えば秘境である。

○　世界的に著名な演出家の鈴木忠志さんは、利賀村に来られる前、東京で制作した演劇により「時代の寵児」としてもてはやされていた。そのときに、彼は突然、「東京では真の芸術は育たない。」と考え、1976年（昭和51年）にこの利賀村に入村された。

○　1982年（昭和57年）に第１回の世界演劇祭「利賀フェスティバル」が開催されたと

きに、鈴木忠志さんの盟友でもある建築家の磯崎新さんにギリシャ風の野外劇場を設計していただいた。その他合掌造りを移築したり、既存の建物を修築したりして、この地に合掌造りの劇場をつくった。これが、外国人には大変評価されている。欧米の方々は、格好の良いヨーロッパ風の文化ホールを見てもあまり感動しない。自分たちのまねをしているという印象しかないからである。この合掌造りの劇場での公演を観劇された方々は本当に感動されるので、是非この利賀で演劇を観劇していただきたい。

○　富山県利賀芸術公園を象徴する代表的な建物として、利賀スタジオがある。カリフォルニア大学や富山県の経済界の方々が、鈴木忠志さんを応援するということで、寄付金により建設されたものである。

○　富山県利賀芸術公園に隣接する南砺市中村体育館は、元は旧利賀村時代に建設されたものである。これを南砺市が過疎債を活用し、１億数千万円で一部改修を行い、「利賀大山房」という大劇場として利用している。全国から大勢の方々が視察に来ておられる。

○　富山県利賀芸術公園創造交流館は、以前、「富山県利賀少年自然の家」であったが、交通事情も悪く、利用者も減少し、過疎化が進展する中で、思い切って舞台芸術の拠点施設の一部として転用することにした。

○　これまでも県と南砺市でそれぞれが施設改修等を分担して行ってきたが、南砺市では、合併後も過疎債を活用した施設整備を行ってきている。過疎債は交付税措置が大変手厚い制度ではあるものの、交付税措置のない部分に対して、県が半分を補助する仕組みなどを設けている。

○　富山県利賀芸術公園のこれまでの歩みについて、触れさせていただく。1973年頃、利賀村では、「利賀村合掌文化村」による村おこしを行おうと考えていた。その後、1976年に鈴木忠志さんが、「東京では本当の文化は育たない。可能性は地方にある。」と、全国を歩かれた際、この利賀村が大変に気に入り、かつての早稲田小劇場の本拠を置くことになる。

○　初めの頃は、少し文化的な摩擦などもあったらしいが、そのうち、鈴木忠志さんの芸術が本物だということを理解いただけるようになった。鈴木忠志さんは当時、岩波文化ホールの芸術監督もされるなど、若手のホープで非常に著名な人であり、彼が地方の過疎地に本拠を置いたということでマスコミからも大変注目され、著名な方々もその活動をサポートし、利賀村にも観劇に来てくれた。

○　このようなこともあって、利賀での取組みが段々と軌道に乗り、1982年には世界演劇祭「利賀フェスティバル」がスタートした。以来毎年、夏を中心に世界演劇祭

が利賀で開催されるようになった。

○　2000年からは、装いも新たに、利賀サマー・アーツ・プログラムがスタートした。以後、単なる演劇祭だけではなく、日本の若手の演出家を育てようと、演出家コンクールも開催。大学生、中高生で舞台芸術を志す人を育てる「人材育成プログラム」もスタートした。

○　北京、ソウル、東京の頭文字をとった持ち回り開催のBeSeTo演劇祭が2001年に地方では初めて利賀で開催された。

○　2005年には、改めて夏の世界演劇祭である「利賀フェスティバル」が復活した。この頃から、本格的に次代を担う舞台芸術の人材を養成するため、スズキ・トレーニング・メソッドを学ぶ「鈴木演劇塾」が開催された。

○　2006年には、「舞台芸術特区ＴＯＧＡ」の認定を受け、舞台における誘導灯の撤去が可能になった。ロシアのプーチン大統領が初めて大統領に就任されたとき、ロシア側の催しに出席されていた鈴木忠志さんに日ロの文化交流を是非にという依頼を受け、「日露文化フォーラム」が2006年に富山県で開催された。

○　2007年には、鈴木忠志さんの舞台の稽古はものすごく厳しいこともあり、人事院の国家公務員の若手幹部の研修として、利賀を利用してもらった。

○　2012年には、鈴木忠志さんが代表のＴＯＧＡアジア・アーツ・センターの前身のＴＯＧＡアジア舞台芸術センターが設立された。参加メンバーには、ギリシャ、インド、イタリア、アメリカ、韓国などの舞台芸術の代表と言える人たちも多く加わった。これが東京ではなくて富山県の利賀にできたというところが、まさに分権の理念だと思っている。

○　また、2000年には、公益財団法人舞台芸術財団演劇人会議を設立した。この事務所を東京ではなく富山県の利賀に置くため手続きをしようとしたところ、地方につくるのはまともな財団ではないのではと言われた。日本は中央集権の国のため、財団をつくるのに東京、大阪、名古屋、京都はともかく、富山県のまして利賀なんて信じられないという感じだった。

○　利賀フェスティバルは1982年から1999年の間に18回公演を行い、約17万人の来場者があった。当時の利賀村の人口が1,200～1,300人だったので、人口の約10倍の来場者という計算になる。その後、2000年から15年で約20万人が利賀にいらしているので、これまでの33年間で37万人の方に来ていただいた。東京や神奈川等の人口の多いところで行えば、この10倍も20倍も来ると思うが、このような過疎地域でよくがんばっているのではないかと思っている。

○　ロシアでトップの芸術座であるモスクワ座の人たちが、以前から鈴木忠志さんの教えを受けに利賀を訪れてきている。そこでいろいろな作品を鈴木忠志さんの指導を受けて、自分たちで創造し、モスクワで公演を行い、高く評価されている。中国の上海戯劇学院等の芸術家の方も、すごく鈴木忠志さんを評価している。鈴木忠志さん自身も上海・北京でも作品を公演しているし、彼の指導を受けた作品を中国で公演して非常に高い評価を受けている。

○　次の時代を担う人材育成をしていかなければいけないということから、ここ利賀では演劇を通じていろいろな人材育成を行っている。大学生、高校生、中高生のワークショップや講習などは以前から行っている。最近では、毎年、世界からたくさんの若手の演劇人が、鈴木忠志さんの教えを受けに利賀を訪れている。１～２カ月間稽古をし、何ヶ国の方々が一緒になって新しい演劇や芝居を創造している。

○　しかし、行政だけでは、このような活動に対してすべて支援できるものではない。そこで、県内の民間企業の代表者らに呼びかけ、「ＴＯＧＡアジア・アーツ・センター支援委員会」という組織を設立していただき、富山県を代表するような企業が利賀での活動を応援しようということになった。

○　今は、地方創生の時代なので、南砺市にもがんばってもらい、「ＴＯＧＡ国際芸術村を核としたクリエイティブビレッジ構想」を打ち出してもらった。このような官民一体となったサポート体制で、いろいろな機会をつくってＴＯＧＡを盛り上げていこうとがんばっている。

４．南砺市利賀村の課題と展望

○　現在、日本では、少子高齢化による人口減少が進み、富山県でも、今の南砺市を入れて五つの市町が「消滅可能性都市」という指名を日本創生会議から受けている。

○　南砺市の五箇山地域の人口を見ると、利賀と平地区では、65歳以上の人が既に40％を超えていて、上平でも35％、南砺市全体が31％、富山県全体は26％という状況になっている。

○　これまでも、このような演劇活動は活発に行われていたし、国際的な注目も受けていたが、南砺市利賀村の人口は減っている。以前は2,000人近くもあった人口が、2004年で913人に減り、2015年３月には589人にまで減少している。

○　五箇山地域の産業は、建設業、宿泊業・飲食、観光関係、製造業、卸・小売、医療・福祉、農業・林業。観光施設の入込数はあるが、上平地区では、東海北陸自動車道ができて便利になったため宿泊者があまりおらず、いわゆる通過型の観光地に

なっている。

○　このようなことから、南砺市では、「ＴＯＧＡ国際芸術村を核としたクリエイティブビレッジ構想」を打ち出し、交流人口の拡大による「滞在型観光地化」を目指そうと、様々な取組みを行い、数値目標を設定した上で、がんばっている。

５．むすびに

○　富山県全体でも人口は減少し、高齢化も進んでいる。しかし、製造業・ものづくりの伝統があり、水が良質で安い、電力が安い、地震も少ない、という富山県のよさがある。県民は働き者が多く、持ち家率・可処分所得が全国でトップクラスであり、最近では１人当たりの県民所得も全国６位となっている。

資料２　住みよさは全国でトップクラス(富山県資料)

○　生活保護率は、この10年以上、全国で一番低くなっている。富山県には、いろいろな事情で貧困になっても、親戚やみんなが助けるという、よき風潮があるからだと思う。災害、犯罪も非常に少なく、保育所入所率、高校生の就職率は全国トップクラスで、女性の有業率も全国４位、法政大学の幸福度ランキングでは全国第２位となっている。

○　しかし、若い人たちに世論調査やアンケート調査をすると、富山県は住みよくていいところだか、少し華やかさ、にぎわいが足りないという声も多く聞かれる。

○　３年前のアンケート調査を見ると、富山県は移住先として、47都道府県のうち29番目になっている。しかし、この２年は連続トップテンに入るようになってきた。富山県も新幹線ができたので、トップファイブに入りたいと今努力をしている。幸い、７、８年前は移住してくる人が200人ぐらいだったが、昨年は400人を超えるようになった。将来、この倍ぐらいにはしたいと思っている。

○　国も東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、文化プログラムを検討しているそうだが、この利賀村をうまくこの流れに乗せてもらいたいと思っている。また、あわせて地方創生という流れの中で、我々がなるべく主体性を持って、利賀村を日本だけじゃなくてアジア、あるいはもっと幅の広い舞台芸術の拠点にしていきたいと思っている。

資料３　ＴＯＧＡ国際芸術村を活用した地域活性化と未来創生（富山県資料）

○　現在の利賀村の課題は、夏の一時期だけの交流人口の拡大だけでは、定住人口にうまくつながらないことである。これだけ多くの人たちが研修を受けに来られるような場所なのだから、文化だけではなく経済学等も含めた研修の場にしたいと考えている。欧米の芸術文化人から見ると、日本の芸術文化人は若干視野が狭いのではないかという説がある。芸術文化のスキルはもちろん、世の中を見る目があればもっとすばらしいものができるのではないかと思っている。

○　そのためには、経済・社会等についても教える場をつくらなければいけない。５月から11月ぐらいまで通年で、そういう世界で、志を持った若い人がたくさん来れ

ば、そこにまた雇用も生まれたりする。それがきっかけでここに定住する人がきっと現れるのではないか。

○　首都圏から中京圏・関西圏に行っている人口流動は、年間１億1,000万人ある。北陸３県には640万人で、富山県には199万人。これが今度の新幹線開業で、臨時便を入れないで1,700万人、臨時便入れると1,800万人から1,900万人近い流動人口が起こる可能性が出てきた。

資料４　新ゴールデン・ルートの形成（富山県資料）

○　私は、何とかこの１億1,000万人の10％でも、北陸を通って関西に行ったり、あるいは北陸でゆっくりして首都圏に戻ったりという人が出てくると、実は、今の640万人プラス1,100万人で大体1,700万人から1,800万人近くになると思っている。富山県を含む北陸を挟んで、首都圏から関西まで新たなゴールデン・ルートができる。

以上の話を伺った後、質疑応答、意見交換が行われたので、以下に主なものを掲載する。

（質問）　これは利賀村だけではないが、地域おこしで成功しているという事例をとっても、人口減を食いとめた事例というのはあまりない。どうしても人口減等の大きな流れをとめられない。そこに効果のある政策・地域おこしは本当にあるのかということは、今回の地域創生の中で問われると思う。利賀村のこの事業をもう少し、定住、準定住につなげていくということが大事だとお伺いしたが、まさにそうだろうと思う。一方で、これだけ人口が減ってくると、このフェスティバル自体を維持する利賀村の状態も、なかなか厳しいのではないかと思う。全国で人口が減る中で、地方の各市町村全部の人口が減らないというのは、至難の業で、東京から移ってもらうしかないという話になるが、何か秘策はあるか。

（回答）　秘策というほどのことはなかなか難しい。いずれにしても日本全体の人口減少が今後20年から30年は避けられないと思っている。しかし、減ってはいるけれども、若い人もそれなりに入ってきて、あと20年から30年辛抱すれば安定するというふうになれば、随分、地域に対する将来展望も違ってくるのではないかと思う。

今、利賀村での演劇も８月から９月という夏の限られた時期での公演となっている。鈴木忠志さんは、世界的にも著名で、世界中からいろんな出演依頼などもあり、それでは利賀村が地域として発展していかない。そこで、春から秋ぐらいまで半年等、舞台芸術の研修コースをつくってはどうかと思っている。今でも世界中から手弁当でそれなりの数の外国人が利賀に訓練に訪れているので、それをもう少し間口を広げることができれば良いのではないかと思う。

この演劇、舞台芸術で、そこへ研修に来る人、あるいは劇団員になって暮らす人が増えると、あわせてこういう文化、舞台芸術の拠点であることが一つセールスポイントになって、平、上平地区の世界文化遺産の合掌造り、あるいは、同じ南砺市平野部の絹織物等の地場産業、そこにアニメの制作会社が来る等のいろいろな要素とうまく連携して、もう少し定住人口が増えるような工夫をしなければいけないと思う。

意外と都市部の若い人にアンケート調査をすると、４割ぐらいは地方への移住を検討してもいいと答えている。現実に最近、富山への移住者が増えているのを見ても、以前は熟年の方が多かったが、最近では、20代、30代ぐらいの方でも移住される方もおられる。

日本人の若い人たちの価値観が少し変わってきているのかもしれない。より高い所得をというよりも、子育て環境がよく、自然が豊かで、ゆとりある生活しながら、もっと自立した人生を歩みたい、設計したいという感じがあるのかもしれない。

演劇の拠点というのも一つだが、もっといろいろな魅力を地域に育てて、安定した雇用の場を、給料はさほど高くないけれども、そういう仕事ができるなら来

たいと思われるような場をつくっていきたい。

これからの時代は、若い人が夢を持てる、こういうことをやってみたいという情熱を持てる場、同じ雇用の場でも、クリエイティブなものをつくる、何かそういう場ができると違ってくると思う。

演劇だけでなく、他のものも含めたもっといろいろな要素を富山県内、特に幾つかの拠点に芽を育てて、ちゃんと実がなるように育てていかなければいけない。

（質問）　移住先のランクが29位から、ここ２年間はベストテンにランクインした。これには何か考えられる要因はあるか。

（回答）　間違いなく北陸新幹線開業という要因がある。３月の開業に向けてこの数年、東京を始め首都圏で、富山県というのがこういう県であるというアピールを随分してきた。そのため、知名度がかなり上がってきたという気はする。

民間の方や県庁の方が東京の方とお話しした体験を聞くと、数年前ぐらいまでは、富山県というと、石川県の西か、新潟県とどっちが北か、そういう調子で聞かれることも多かったが、最近は、むしろ、富山県の自然が、立山黒部等が雄大で美しいと言われる。富山県の出身だと言うと、魚がうまいところ、鮨がうまいところとか、そういうふうに言われるようになってきた。

知名度が上がってきている。そういう県、地域があるということが、まず意識に上がらなければ、移住先の選択肢にそもそもならない。新幹線開業に向けて観光振興、企業誘致をもっと熱心にやるという、いろいろな努力をしてきたことが結果として知名度の向上になったり、イメージアップになったりしていることもある。

この利賀村、大伴家持生誕1300年記念事業、あるいは近代美術館の移転新築もそうだが、人があるところにお金をかけて旅をしたいと思うには、自然が豊かで美しいとか食べ物がおいしいという以外にも、何か文化的なものがあるということも大事なのではないか。そこに行けば何か文化的なもの、洗練度の高いものに出会える。あるいは、それを体現するような人物と交流できる、何かそういう要素があって、人は行ってみようかということになる。

この利賀村を舞台芸術の拠点にしていくことは、実は利賀村だけの問題ではなくて、富山県全体のイメージアップにつながると考えている。そういうことを大事にしている県なり地域なら、ちょっと行ってみようという、相当な動機づけになるのではないか。そういう面でもこういう活動を応援したいと思っている。

（質問）　これだけ富山県で文化ホールや美術館、博物館があり、ずっと全国でトップクラスで維持されているというのは、ここから黒字で回るような仕組みができているのか。なぜこのような高いポジションを維持できているのかを教えていただきたい。

（回答）　いろいろな文化施設をうまく回すのには、どのぐらいのお金をどのように使っているのか、相当使っているのかということだと思う。あるいは、独立採算でやっているとすれば、どういう工夫があるのかというところだと思う。

県内の美術館、博物館、公共ホールは、建物をつくったときの資本費を回収しようという発想はそもそもない。あとは、音楽コンサート、演劇、美術の展覧会をして、フローとして、そこで入場料収入がどのぐらい入るかということがある。しかし残念ながら、入場料収入でフローの経費を賄えるというところはほとんどない。国立でも、ほとんど公的な支援が入っている。もちろん県立、市町村の建物もあるし、寄附もあるが、入場料収入とか何かで賄えているのは、３割ぐらいあるかどうかではないか。

そのため、県によっても多少違うが、行政がお金を出している。ありがたいのは、富山県の皆さんは、自分はなかなか仕事や何かに追われたり等の事情があって、文化的なものを身につける時間はないけれども、次の時代を担う子どもにだけは、ちゃんとした音楽、あるいは絵を鑑賞する等、何か文化的なものに親しませてやりたいと考えてくださっている。これは世論調査をすると、富山県では県民の声として非常に高い。そこに税金をつぎ込んで応援しているということは、皆さんがある程度やむを得ないと思ってくれているからこそ成り立っていると思う。